身体着脱動詞語彙の地域性

― 大阪方言と熊本県下益郡砥用町方言を例として ―

井　上　博　文

Ⅰ．問題の所在

本稿は、近畿方言に属する大阪方言と、九州肥筑方言に属する熊本県下益城郡砥用町方言の身体着脱動詞語彙を対照することによって、（1）単語相互の組み合わせによって生じる方言性の指摘[注1]、ならびに、（2）対義語構造[注2]の一端について考えようとするものである。ここに言う身体着脱動詞とは、「人が、着物や下着、装飾品、医療用具などのモノをなんらかの目的をもってを身体につける動作、並びにつけたモノを身体からとる動作を表す動詞」とする[注3]。人間の肉体そのものに直接につける（からとる）ことばかりではなく、人が服装の上につける（からとる）ことも含むものとする。モノを身につけること、身につけたモノを取り去る（取り除く）ことである。

「身体着脱動詞」という概念の場を設けて、目的語（動作対象の名詞）と統語論的に結びつく動詞を得て、それらの動詞の用法差を手掛かりにして動詞の意味を見出すことである。以下に、具体的な「身体にモノつける動作を表す動詞」で構成される意味場を《つける》、「身体からモノをとる動作を表す動詞」で構成される意味場を《とる》と表記する。

《つける》に所属する動詞は〈つける〉という語義特徴を共有し、《とる》に所属する動詞は〈とる〉という語義特徴を共有する類義語の関係をつくる。と同時に《つける》と《とる》とに所属する語は対義語の関係をなす。このとき《とる》は《つける》によって一定の事態が成立していることが前提である。着ていなければ脱げないのである。個々の動詞はそれぞれが内包する動作概念によって別の概念の場に繋がっている。したがって、本稿で類義語や対義語というときは身体着脱動詞語彙の範囲内のことである。あるモノを身につけるという現実世界での具体的な着脱行為の同一・類似性が類義語の、反対方向の着脱行為が対義語の担保となっている。

Ⅱ．調査方法と調査結果

2－1　調査方法

調査結果表に示した動作対象の名詞を提示して、〈つける〉〈とる〉ことをどう言うかを尋ねた。その際に自然な文例や事象についての話者の説明を求めた。提示した名詞以外についても当てはまるものをできるだけ聞いた。また、参考のために項目49～55を併せ尋ね

表1　調査結果表

動作対象	大阪方言		砥用町方言		備考
	〈つける〉	〈とる〉	〈つける〉	〈とる〉	
(01) 帽子	K	＝ ∫	K	＝	
(02) 手ぬぐい	K	∫ ▽	K	∫	
(03) 背広	●	＝	●	＝	
(04) セーター	●	＝	●	＝	
(05) 羽織	● ※1	＝	● ハオール	＝	※1　ハオルは簡略に上からかける場合
(06) ズボン	△	＝	★	＝	
(07) スカート	△	＝	★	＝	
(08) パンツ ※2	△	＝	★	＝	※2　(砥)サルマタが普通
(09) ふんどし ※3	◇	▽	S ※4	▽ ※5	※3　(砥)ヘコと言う
(10) 手袋	○ △	▽ ∫	○ ★	＝	※4　ヘコカク
(11) 靴下	△	＝	★ △	＝	※5　ヘコカユル
(12) 靴	△	＝	¶ △ ※6	＝	
(13) 草履(スリッパ)	△	＝	¶ △	＝	※6　ジキタビ(地下足袋)、下駄、長靴も同じ
(14) つっかけ	ツッカケル △	＝	¶ △	＝	
(15) はちまき	◇	▽	◇	∫	
(16) たすき	□	▽	□	∫ ▽	
(17) よだれかけ	□	∫ ▽	○	▽ ※7	※7　カユッ(換える)
(18) 襟巻き(マフラー)	M	∫	S M	∫	
(19) ネクタイ	◇ M ○	▽	○	∫ ▽	
(20) バンド(ベルト)	◇	▽ ∫	○	▽	
(21) 帯	◇ T 〒	▽	◇ S	∫ と	
(22) 帯締め	◇ 〒 トメル	▽ ほ と	○ ◇	∫	
(23) 腕時計	○ T	▽	○	▽	
(24) 指輪	◎	▽	○	∫ ▽	
(25) イヤリング	M	▽	○	▽ ∫	
(26) ネックレス	□ T	▽	○	∫	
(27) リボン	〒 T ※8	ほ ∫	○	∫ ▽	※8　ツケルは形になっているものの場合
(28) かんざし	★	ヌク	★	∫	
(29) 腕章	M	▽	○	▽ ∫	
(30) 名札	T	▽ ∫	T	▽	
(31) 眼鏡	□	▽ ∫	○	▽ ∫	
(32) コンタクトレンズ	○	▽	○	∫	
(33) マスク	S □	∫	□	∫	
(34) 眼帯	□	▽	○	∫	
(35) 入れ歯	I ○	▽	○ I	▽	※9　(大)ギビスとも
(36) ギプス ※9	○	▽ @ ※10	○ T	∫ ▽ @	※10　ハズレルも
(37) 湿布	#	⊖ H ∫	#	▽ ∫	
(38) パンソーコー	# T	∫ ⊖	#	∫	
(39) 包帯	M	∫	S	∫	
(40) 口紅	T	F	T N	∫	

(41) 白粉	N	F A	N T	A ∧ ■
(42) 化粧	S	∧ ∫	―― ※11	A ■
(43) マニュキュア	N	∧	N	∧
(44) 赤ちんき	N	∧ F	N	■
(45) ハンドバック	さ モツ ※12	▽ お ※13	さ	お
(46) ランドセル	セオウ ▼ ※14	ヨ ▽ ∫	⇒ ※15	▽
(47) 赤ちゃん(背中)	オンブスル ▼	ヨ	⇒	ヨ
(48) 赤ちゃん(前)	D ダッコスル	ヨ	D	ヨ
(49) 掛け布団	□	▽ H	●	H
(50) 座布団	シク・アテル ※16	▽	(スワッ)	(オジッ)
(51) お灸	スエル	――	ヤーク	∫
(52) 注射	U S	――	U S	――
(53) 青あざ	で	キエル	(アオルッ)	Y @
(54) おでき	で	ナオル	で	Y
(55) 鼻くそ	た	ホジル	た	クジッ

※11 化粧することはオシロイツケルと言う

※12 モツは紐のないカカエの場合

※13 オクはカカエの場合

※14 セタロウは古い言葉

※15 モノの持ち方を表す動詞のイナウ、カタグル、モツ、サゲルなどとつながる

※16 アテルは改まった時に相手に使う

凡例

〈つける〉

K	カブル	#	ハル
¶	フム	〒	ムスブ
●	キル	I	イレル
△	ハク	U	ウツ
★	サス	さ	サゲル
○	ハメル	S	スル
T	ツケル	▼	セタラウ
◇	シメル	⇒	カラウ
□	カケル	D	ダク
M	マク	で	デキル
N	ヌル	た	タマル

〈はずす〉

＝	ヌグ	A	アラウ
∫	トル	∧	オトス
▽	ハズス	ヨ	オロス
ほ	ホドク	■	アヤス
と	トク	@	トレル
㊀	ハガス	Y	ヨーナル
H	ハグ		
F	フク		

(注)スルはマスクスルのように名詞を受けて特定の動作を表し、スル単独でははたらかない。

た。調査日時・教示者は大阪方言；1999. 12. 28、(女性. 明治. 44)（女性. 大正. 15)（女性. 昭和. 33)、いずれも大阪府生まれ、現在は藤井寺市在住。砥用町方言；2000. 1. 3、(男性. 昭和. 2）（女性. 昭和. 7)、いずれも土地うまれ土地育ちである。教示者による違いがわずかに認められた[注4]。世代差については次の課題としたい。

2－2　調査結果表

身体着脱動詞語彙の動詞を記号化して表にしたものが表1（調査結果表）である。凡例に示したように音訛形や活用の種類をここでは問題にせずにまとめた。

2－3　動詞の整理

調査で得られた動詞を《つける》《とる》の別に、二方言ごとに整理すると表2（動詞整理表）のようになる。なお、項目49～55の動詞は省く。語形の上の線は語アクセントの高音部を示している。また項目01～48で該当の動詞の現れた数値を示した。

表2　動詞整理表

《つける》					《とる》				
見出し動詞	大阪方言		砥用町方言		見出し動詞	大阪方言		砥用町方言	
カブル(被る)	カブル	2	カブッ	2	ヌグ(脱ぐ)	ヌグ	11	ヌグ・ヌーグ	12
キル(着る)	キル	3	キッ・キール	3	トル(取る)	トル	15	トール・トッ	22
ハオル(羽織る)	ハオル	(1)	ハオル	1	ハズス(外す)	ハズス	22	ハズス	16
ハク(履く)	ハク	8	ハーク	3	ホドク(解く)	ホドク	1		
フム(踏む)			フーム	4	トク(解く)	トク	1	トク	1
シメル(締める)	シメル	6	シムッ	3	ハガス(剥がす)	ハガス	2		
ハメル(填める)	ハメル	7	ハムッ・ハムール	16	ハグ(剥ぐ)	ハグ	1		
カケル(掛ける)	カケル	6	カクッ	2	フク(拭く)	フク	3		
	ツッカケル	1			ヌク(抜く)	ヌク	1		
マク(巻く)	マク	4	マク・マーク	1	オトス(落とす)	オトス	3	オトス	2
ムスブ(結ぶ)	ムスブ	2			オロス(下ろす)	オロス	3	オロス	2
ツケル(付ける)	ツケル	8	ツクッ	4	アラウ(洗う)	アラウ	1	アラウ	2
トメル(留める)	トメル	1			アヤス			アヤス・アヤース	3
サス(刺す)	サス	1	サース	6	トレル(取れる)	トレル	1	トルッ	1
サゲル(下げる)	サゲル	1	サグッ	1	オク(置く)	オク	1	オーク	1
モツ(持つ)	モツ	1							
スル	スル	2	スール・スッ	4					
イレル(入れる)	イレル	1	イルッ	1					
ハル(貼る)	ハル	2	ハール	2					
ヌル(塗る)	ヌル	3	ヌール	4					
ダク(抱く)	ダク	1	ダーク	1					
	ダッコスル	1							
(背負う)	セオウ(シェオウ)	2							
	セタラウ(セッタラウ)	2	カラウ	2					
	オンブスル	1							
カク			カーク・カク	1					

大阪方言は《つける》24語、《とる》13語、砥用町方言は《つける》19語、《とる》9語である。砥用町方言では、二音節語の第一音節母音の半拍程度の引き音、語末音の狭母音の無声化、脱落に近づく現象による音変化や、二段動詞の残存によって方言語形が目立つ。また、語アクセントの違い、さらに発話文の文アクセントの違いによって同じ出自の語であっても表現レベルでの違いは大きくなる。

Ⅲ．身体着脱動詞の類義語

表1（調査結果表）によって、個々の項目の動詞（項目01～48）を見ると、一つの動詞のみのものと、複数の動詞が併存するものとがある。後者は語義的特徴の違いによるものと文体的特徴の差異によるものとに見分けることができる[注5]。砥用町方言の靴下《つける》にはハクとサスとが併存しており、ハクは新しい語という文体的特徴を持つ。サスの意味領域にハクが入り込もうとする現象で、靴下が履き物と近接するためにまずここに浸入したと考えられる。動態的にはサスとハクとのせめぎあいである。

表2「動詞整理表」を見ると、異なり語数では《つける》が多であり、《とる》で少である。語の動作対象数では、《とる》でヌグ・トル・ハズスの3語が多く、特にトル・ハズスは広い範囲で用いる。《つける》はハメルの動作対象数が多くなっている。《つける》動詞は特定の対象をとる動詞が主である。概して言えば、《つける》動詞はモノの身体へのつけ方の違いによって細分化し、《とる》動詞はモノを身体からとること自体を抽象的に表す総合的なものである。

3－1　《つける》の類義語

（1）大阪方言のハクは下半身につける衣服、履き物、手袋や靴下に用いる。砥用町方言のハクは履き物（靴・草履・スリッパ・地下足袋・長靴・下駄など）と靴下に限られる。一方、サスは大阪方言ではかんざしに限られるが、砥用町方言では下半身の衣服（ズボン・スカート・パンツ・股引・スットキングなど）と手袋・靴下に用いる。これらは対象に身体の一部を入れて着る動作のものであり、身につけるときの付け方に着目した語である[注7][注8]。

01. ス「カト　シャーチ　イクト　カー┐イ。（砥）　スカートをはいて行くのかい。

02. サ「ンカケン　テ「ブクロ　シャーチ　イク　タ┐イ。（砥）　寒いから手袋はめて行ったら。

履き物に動作対象を限定したフムが砥用町方言にある。履き物を指示するフンモン（ふみもの）という名詞も存する。

03. 「キョー┐ワ　ジ「ュッタンボダ┐ンケン　ナ「ガグツ　フンデ　ハッテコ。（砥）　今日は（雨が降って）ぬかるみだから長靴を履いて行こう。

（2）帽子や手拭いなどを頭の方向からある程度の広さの平面を覆うように身につけることはカブルである。同じく頭につけてもリボンはカブルではない。

04. エ「ラ┐イ　「ハイ　┐イッパイ　ツ「キ┐マッシャ「ロ。「イン┐デ　「ハ┐ヨ　「テヌグイ　カブットキー。(大)　とても灰がいっぱいつくでしょう?(そんな時に)早く帰って手拭い被ってなさい。

(3) 上着の類は大阪方言・砥用町方言ともキルを用いる[注8]。しかし砥用町方言では掛け布団(項目49)もキルである。大阪方言はカケルである。

05. ○シェ「ビロ　キテ　ハッテコ　カ。(砥)　背広を着て行こうか。

06. 「フト┐ン　「キテー　ネロ　カ。(砥)　(寒いから)掛け布団きて寝ようか。

両方言とも羽織は上着と同じくキルである。大阪方言のハオルは袖を通さずに簡単に肩の上から掛ける。砥用町方言のハオルは袖を通して着る。

07. 「チョッ┐ト　ナン┐カ　「ヨージスル　トキ「ニ　テー┐モ　トーサン┐ト　「バッ┐ト　ウ「エ　「バッ┐ト　キトク　「ヤ┐ツ　ハオル　┐ユーンデス　「ナ。(大)　ちょっとなにか用事をする時に手通さないでぱっと上に着ておくやつをハオルと言うんですね。

(4) シメルは、帯状もしくは紐状のモノで、身体部位のまわりを巻いて圧迫してつけるものである。カケルは特定の身体部位(眼鏡・マスク・眼帯は耳、ネックレスは首、たすきは肩)を固定のために利用して身につけるものである。ただし、よだれかけは掛け布団と同じように身体の表面の一部を覆うようにつけるものである。シメル・カケルともに動作対象は大阪方言が広く砥用町方言はそこに含まれる。

08. 「アン┐タ　「メ┐ガネ　「カケルヨ┐ーン　「ナッタン　カ┐イ「ナ。(大)　あなた、眼鏡をかけるようになったのかい。

(5) ハメルは小さなモノを所定の箇所に固定するようにつけるものである。シメル・カケルと反対に、砥用町方言での動作対象が広く、大阪方言はそこに含まれる。

09. ネッ「クレス　ハミュ┐ー　カ。(砥)　ネックレス、つけようか。

ツケルは、モノを着けること自体を表し他の語に比して具体的な動作概念が希薄である。大阪方言でリボンにムスブとツケルの二語が併存するが、ムスブは実際に結んでつける場合であり、ツケルは既にリボンの形状になったものを取り付ける場合である。

10. イッペン　「ツケテミテチョーダ┐イ。(大)　(イヤリング)一回つけてみてください。

(6) ハルは湿布・バンソーコーのような平面状のモノの表面を密着させてつけるものである。ヌルは液体やクリーム状のモノを、ある面積に薄く伸ばしてつけるものである。

11. コ「ケ　バンソコバ　ハッテクレ。(砥)　ここにバンソウコーを貼ってくれ。

12. ク「チベンバ　ヌッテイク　タ┐イ。(砥)　口紅をぬって行くといいよ。

ムスブは帯・帯締め・リボンのような帯状・紐状のモノを組み合わせて固くしめてほどけないようにしてつけるものである。マクは襟巻き・ネクタイ・腕章のような帯状のモノを特定の身体部位の回りを取り囲んでつけることである。イレルは入れ歯でのみ得られた。

13. 「ワン┐ショ　「マ┐イテ　「イカ┐ナ　「アカン　┐ヨ。(大)　腕章を巻いて行かないけないよ。

モノを身体部位の中に挿入して取り付ける動作である。ただし、ハメルが普通である。イレルは歯医者で入れ歯をつくって装着することを指す場合が多い。

14. イ「シャドンカャチャ　イ┐テ　キョー　イレバ　イレチモロチ　キタ。(砥)

お医者さん方に行って、今日、入れ歯を入れてもらってきた。

(7) ハンドバック、ランドセル、赤ちゃんは「身体着脱」の対象としては周辺域に位置する。ハンドバックは大阪方言で紐で肩から下げる場合はサゲル、紐を用いずに肩にかけずに手に持ったり脇に抱えたりする場合はモツと区別する。砥用町方言ではいずれもサゲルである。大阪方言で、なにかを背負うことはセタラウである。このセタラウは古い言葉との文体的特徴を持つ。子どもを前に抱くのはダクである。オンブスルとダッコスルは動作対象が子どもに限定されモノには用いない。

15. 「セタロー┐タ　ホーガ　「ラー┐クヤ　「デ。(大) (ランドセル) 背負った方が楽だよ。

砥用方言はランドセルも赤ちゃんも背負うのはカラウで、前に抱くのはダクである。

16. コ「ドンバ　カ「ラオ┐　カ「ネ。(砥)　子どものを背負うかね。

(8) 項目53～55の青あざ・おでき・鼻くそは外側から〈つける〉のではなく、自然と出来るものであって、自動詞のデキル・タマルで表す。砥用町方言には青あざが出来ることを表す動詞アオルッがある。

3－2　《とる》の類義語

(1) 《とる》はヌグ・ハズス・トルが中心となる語である。話者はハズス・トルを他の語の説明に使う。ヌグは手ぬぐい・ふんどしを除く衣服、履き物を対象とする。基本的に、ヌグはある部分を包むように覆っていたモノをとる場合、ハズスとトルはある特定の部分に付属的についていたモノをとる場合に用いる。ハズスは、モノをそれぞれの特定の取り付け方でしっかりと付けたものをとる動作である。トルは具体的な動作を指示するのではなく、付けたものを〈とる〉動作を表す抽象的な語である。トルは他の語と併存する。大阪方言でハズス、砥用町方言でトルが多くの動作対象と結びついている。

また、手袋に大阪方言でハズス・トルを用いるが[注9]、砥用町方言ではヌグである。

17. テブ「ク┐ロ　ハズ「シ┐トキー。(大)　手袋、ぬいでおきなさい。

(2) ホドク・トクは紐状・帯状のモノで結んで取り付けたモノをとる動作、ハグ・ハガスは貼って付けたモノを取り除く動作である。大阪方言では掛け布団もハグである。

18. 「ア┐ツイ　「ナ。「イチ┐マイ　ハ「グ　┐ワ。(大)　暑いね。一枚とるよ。

(3) 口紅・白粉・化粧・マニュキュア・赤ちんを〈とる〉ことは付いたモノを不用なものと見なすことが前提にある。大阪方言にフク・アラウ・オトス・トル、砥用町方言にアラウ・アヤス・オトスがある[注10]。

19. ア「ー　アンマ　ヨンニュ　チートル　「ゾ。「チッ┐タ　ア「ヤサナン　タ┐イ。(砥)　ああ、あんまりたくさんついているぞ。少しはおとさないとね。

20. ヘ「グロン　ヒッチトッ┐テ　ア「ヤサニャン。(砥)　鍋ずみが (顔に) 付いている、

おとさないと。

フク・アラウは対象の落とし方に着目するものである。

（4）赤ちゃんをおろすとき、《つける》では区別したが、《とる》では背負っていても抱いていても同様にオロスである。ランドセルにはオロス・ハズス・トルの三語がある。赤ちゃんにはオロスだけに限られる。ここに対象の区別にヒトとモノとの差がある。

21. ランド「セーール　ハ「ヨ¬ー　オロ「シー¬ナ。(大)　ランドセル早く下ろしなさい。

砥用町方言でも赤ちゃんはオロスでランドセルのハズスとと区別がある。

（6）《つける》の範疇ではないが、医療的な行為は別として通常、青あざやおできは動作主体の意志によって取り去ることはできず自然に治るのを待つ。大阪方言でキエル・ナオル、砥用町方言でヨーナル・トレルのように自動詞を用いる。ギブスもトル・ハズスとともにトレルがある。化粧類がトレルことはマイナスの評価であるが、これらはプラスの評価となる。

Ⅳ．対義語の構造

4－1　《つける》と《とる》の対応関係

表1（調査結果表）で、大阪方言と砥用町方言を見比べると、《つける》《とる》のそれぞれの枠組みで、(a) 一致するもの、(b) 同一の語を共有しながらなんらかの違いのあるもの、(c) まったく異なるもの、の三つに見分けることができる。(b) は、①一方にのみ他方にない語があるものと、②それぞれに異なる語があるものとに分けることができる。いくつの項目が属するかを、《つける》と《とる》を一組として整理すれば以下のようになる。

《つける》／《とる》			(a) 21	(b) ①13	②2	(c) 12
(a)		14	4	5	1	4
(b)	①	14	9	3	1	1
	②	4	1	0	0	3
(c)		16	7	5	0	4

《つける》《とる》ともに同じものは4項目（項目03、04、36、44）のみであり、あとの44項目に《つける》《とる》の間でなんらかの異なりが存するのである。後者のうち《つける》《とる》ともに異なるものは4項目である。類義語どうしの対照ばかりでなく対義語をも視野において、両者をまとまりとして対照させるとき入り組んだ複雑な様相が立ち現れてくる。

4－2　対義語の対応

大阪方言と砥用町方言のそれぞれの方言において、《つける》と《とる》に属する動詞相互がどの動詞と対義語の関係をなしているのかを整理したものが表3である。

多くの語と結び付いているものは、《つける》で大阪方言でツケル5語、砥用町方言で

表３－１
［大阪方言］

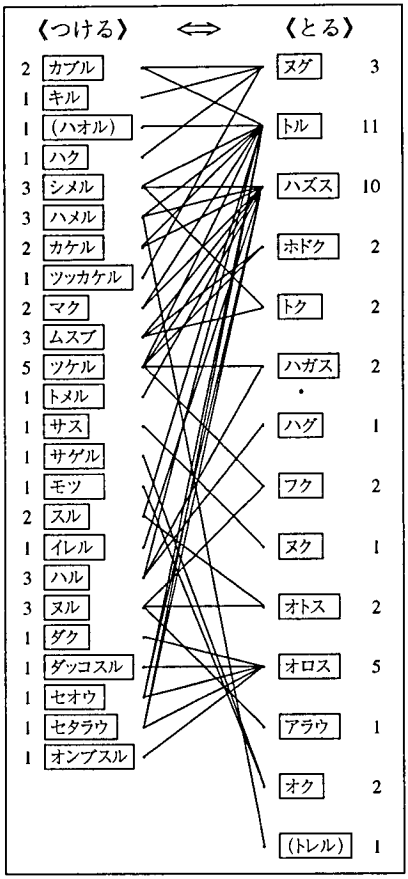
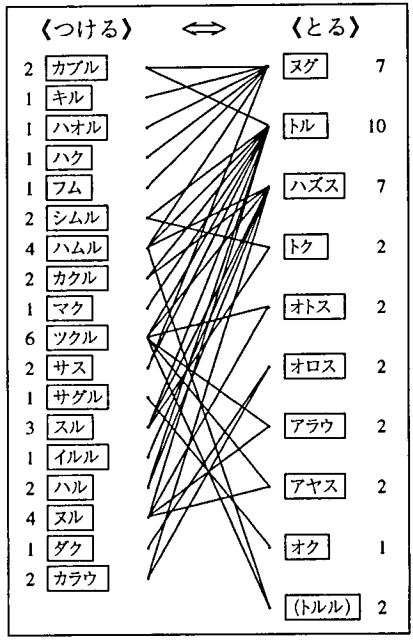


表３－２
［砥用町方言］



ツクル６語である。《とる》は大阪方言でトル11語、ハズス10語、オロス５語、砥用町方言でヌグ７語、トル10語、ハズス７語である。《とる》を構成する語は《つける》を構成する語と多岐に結びついている。

項目にそって対義語の関係にある個々の語を見ると、例えばカブル―ヌグ、カブル―トル、キル―ヌグ、ハク―ヌグ、イレル―ハズスのように大阪方言と砥用町方言で共通するものがある。これらは概して「標準語」の形式である。一方で、例えば大阪方言のシメル―ハズスや砥用町方言のフム―ヌグのように他方の方言にない組み合わせが存する。後者を示すと以下のようである。

大阪方言；シメル―ハズス、ツッカケル―ヌグ、マク―トル、ムスブ―ハズス、ムスブ

—ホドク、ムスブ—トク、ツケル—ハガス、ツケル—ホドク、ツケル—フク、トメル—ハズス、サス—ヌク、モツ—オク、～スル—オトス、～スル—ハズス、～スル—トク、ハル—ハグ、ヌル—フク、ダッコスル—オロス、セオウ—オロス、セタラウ—オロス、オンブスル—オロス

砥用町方言；フム—ヌグ、ハメル—ヌグ、ツケル—オトス、ツケル—（トレル）、サス—ヌグ、サス—トル、ヌル—アヤス、カラウ—ハズス、カラウ—オロス

意味の地域性の観点から注目すべきものである。あくまで身体着脱動詞語彙の範囲のことである。ここでセタラウ、カラウ、アヤスのように一方の方言にない方言語形（非「標準語」形）を含むものがここに入るのは当然のことである。また、対義語といっても身体着脱動詞語彙の外では対応してなかったり、他の語と組になったりする。

語は存しながら組み合わせがない一群がある。これは二種類に分類できる。一つは身体着脱動詞語彙内で組み合わせがないものである。例えば砥用町方言「サス—ヌグ」のサスとヌグは、大阪方言の身体着脱動詞語彙に二語ともあるがこの組み合わせはない。一つはその方言の語彙に語があっても身体着脱動詞語彙に属さないので組み合わせがないものである。例えば大阪方言にフム（踏む）という動詞はあっても「靴＋フム」はなく、砥用町方言に存する「フム—ヌグ」の組はない。動詞フムの意味にずれが存するからである。

以上のように類義語内部の分析にとどまらず、対義語の構造を視野におくことで意味構造の方言性が出てくる。

V．方言意味論の課題として

一つ一つの単語では、取り立てて方言性の希薄な単語であっても、他語との組み合わせによって、方言性が顕現する現象が存する。これは本稿で扱った「名詞—動詞」ばかりでなく、他の品詞相互の組み合わせにおいても指摘できる。俚言のような「標準語」形と隔たりのある語形であれば意味への注意が向きやすい。しかし語形の上で「標準語」と一致あるいは類似するもの、方言語形のものであっても相互の方言で共有するものの意味の差異は見逃しがちである。言語形式の組み合わせを視野におく意味論的な考究が求められる。

身体着脱動詞語彙の内部における二つの意味の場の対義語の対応を検討した。本稿では意味の関連をさぐる視野を類義語内部にとどめるのではなく、対義語のまとまりに広げた。個々の語から伸びた意味特徴の手がからみ合い、意味の場相互がつながっているさまを見た。こうした対義語をめぐる様相の差異にも方言性が存する。ここには意味の転移や多義語の問題が絡んでくる。

注

注1　平澤洋一『日本語語彙の研究』(1996.10　武蔵野書院)「第八章　地域的意味　2意味の地域性」に滋賀県湖北方言のアケ゛ル・ソナエル類について「相手、位置、対象、動作、新古、語勢力」から分析し体系の比較を行っている。この方法によって近接する方言間の意味の共通性と差異性が確かめられている。

注2　反義語を意味特徴を共有し語義特徴のある一点で対照的な反対関係にあるもの、対義語を反義語に比してゆるやかな反対関係にあるものとする。対義語の構造については諸説があるが、森田良行『意味分析の方法』(1996.2　ひつじ書房)は、「肯定・否定関係、程度の大小関係、両極関係、方向性の関係」を挙げている(第8章　対義語・類義語の諸問題)。〈つける〉と〈とる〉はここで言う「方向性の関係」で対義(反義)語のまとまりをつくっている。

注3　ボタンやチャックへの動作を表す動詞は着脱動詞とはしなかった。着脱したモノについての二次的な動作だからである。ちなみにボタンは、大阪方言「カケル―ハズス」、砥用町方言「ハムル―ハズス」と、ここにも違いが見られる。

22.「ボ¬タン　「カ¬ケ　「ヤー。(大)ボタン、とめなさいよ。

注4　語彙の部分体系における個人差の問題については、岩城裕之「大崎下島大長の数量副詞にみる個人性と社会性　―数量〈多〉と〈少〉のカテゴリーの場合―」(広島大学国語国文学会『国文学攷』第160号　1998.12)のように意義特徴のレベルまで降り立った分析が有効であると思われる。

注5　真田信治「語彙研究法」(『講座方言学2　方言研究法』1984.10　国書刊行会)の「語の文体的特徴について」(224頁)の中で、五箇山方言の語例してと「たばこ吸う」を「改まり語」、「たばこ飲む」を「日常語」と分析している。方言類義語の分析においても文体的な視点が大切な要素となる。

注6　文アクセントで上昇は「「」、下降は「¬」で示す。また、文例の調査地点を文末に大阪方言を(大)、砥用町方言を(砥)と記す。

注7　発話文では目的語に格助詞「を」(砥用町方言では「バ」も)を下接することは少なく、顕在する場合は動作対象を取り立てて示す場合に用いられる。

23. サ「ルマタ¬バ　サ「サニャ¬ン。(砥)サルマタをはかないと。

注8　牧村史陽編『大阪ことば辞典』(1984.10　講談社学術文庫658　第17刷使用)の「キル(着る)」の項に「かぶる。着物や下着だけでなく、帽子キル・笠キル・おそこ頭巾キルなどと、みな『着る』で、帽子をかぶる・笠をかぶるとはいわなかった。」(207頁)とある。『日本方言大辞典　上巻』(1989.3)の「きる(着)」の項に「②帽子や笠(かさ)などをかぶる」(723頁)とあ方言の一部り、京都、大阪、神戸市、岡山県児島郡、四国が挙げられている。参考文献6所収の58　傘をさす(1)さす　老女層」では大阪市周辺部にキルが分布する。古川なお「大阪市周辺における言語流動―南河内・泉北地域について―」(昭和61年度大阪教育大学国語専攻卒業論文)所収の「傘をさす」の方言地図を見ると、大阪和泉方言や南河内方言の一部に「傘キル」の分布が残存し「傘サス」の勢力に押されて衰退するさまが見られる。滋賀県湖西域の調査(1998.8)でも「帽子キル」を得ている。

注9　参考文献6所収の「57　手袋をはめる(1)老女層」の分布地図を見ると、大阪市中央部にハ

ク・ハメルが分布し、その周辺域にサスが分布している。

注10　千歯を使って穂から粒を落とす作業を指示するイネアヤシ（稲あやし）・ムギアヤシ（麦あやし）の名詞がある。柿の実を数個落とすことはオトスであり、梅の実を木から全部落としてしまうのはアヤスとなる。なお、柿の実をもぐことはチギル。自動詞のアユルは雨がぽつぽつと降ること、表面に付いた汚れなどが落ちることなどを表す。

参考論文

1）服部四郎「意味」（1968.10　『岩波講座　哲学11　言語』岩波書店）

2）宮島達夫『動詞の意味用法の記述的研究』（1972　秀英出版）

3）本堂寛「語形式と意味との結びつき―美作・播磨国境地域の方言から―」（1978.10『日本方言の語彙』三省堂）

4）柴田武編『ことばの意味１～３』（３は國廣哲彌編）（1976、1979、1982　平凡社選書47、66、73）

5）国廣哲彌『意味論の方法』（1982.2　大修館書店）

6）佐藤虎男編『大阪市域言語地図集　1983』（1983.5　大阪教育大学国語学研究室）

7）室山敏昭『生活語彙論の基礎的研究』（1987.2　和泉書院）

8）森田良行『意味分析の方法』（1996.2　ひつじ書房）

――いのうえ・ひろふみ、大阪教育大学助教授――